特44
81

清代知人論世之學

宗家

橘旭翁先生校閱

天陵

盛世

完

265
109

松本中尋傳

意思緒

明治
43. 6. 27
內交

己酉初夏

柳江題

九州帝国図書館
義雄

知盛

玉蘭作

因果はめぐる小車の
生田の森は花のみにて
身を知る雨ぞ降りしきる
蒲の冠者範頼に
榮へし春もすぎ木立
死出のたびぢの首途に
扨ても新中納言知盛は
散々に打ち成され

嫡子知章にも引き分れ　こゝろぼそくも唯一騎
濱邊をさして落ち給ふ　こゝろの中や烏羽玉の
闇路にまよふ蘆田鶴の　行きぞわづらふ風情也
かゝる所に源氏の兵　團扇の旗さしかざし
五六騎ばかり追ひ縋り　已に間近くなりけるが

折もこそあれ知章は　森のかげより馳せ来り
父を討たせじと押隔て　父上あやふく候ぞ
此所は我等に任せられ　疾々御落延び給へかしと
いふ隙さへもなきなたを　揮り翳しつゝ戰ひしが
むらがる敵に圍まれて　あはれはかなく知章は

修羅の衢に散るつゆの
苅藻川原に住む虫と
去程に知盛たもふやう
我亦ともに危ふからむ
君恩に背くたそれあり
玉をあざむく粧も
倶に音を絶に失せにけり
今此所にて返し戰ひなば
さりては私情の為め
子を討たせしは残念なる
是れ戰場のならひなり
臣たる者の本分なれど
涙をふるひこのひまに
ザンブと馬を乗入れて
難なく著かせ給ひしが
君の御先途見奉るこそ
とみに心を決しけむ
やうやく落延び海中に
沖にうかべる御座船に
船にはすでに人れほく

馬立ツべうもあらざれば
宛然人に物言ふ如く
別を惜みたまひつゝ
馬はば〳〵ふりかへり
漸くゝがにのぼりけり

せんすべなみに知盛は
馬の鬣撫でさすり
渚の方に追ひかへせば
ふたゝび三たび嘶きて
越鳥南枝に巣をかけ

胡馬北風にいばへしも
胡馬は北風を慕ひけむ
纜にしもとゞもなはれ
思ふ氣色のあらはれて
漸くにしてとゞもゝりは

舊交をしのぶ故ぞかし
此馬は西海に往く船の
主に從ひゆかばやと
哀れにこそは見にけれ
大臣の御前に出でさせて

涙をたさへ申しけるは
すでに危き其ところを
天晴れかれは討死候ひぬ
敵を支へてたゝかふを
子の討るゝを他に見て
我等今も敵に迫られ
とも章にすくはれしが
子はちゝを討たせじと
假令いかなる仔細あれば迚
ためらゝ遁れ候やらん
いと愧しふこそ候へと
一度に胸にあふれ出で
むせび入てぞ歎きける
ふるは涙かしらつゆか
あらしのさそふ村雨の

愛憐の情慚愧の心
言葉も咽に押し迫まり
なみ居る人の袖の上に
それかあらぬか玉あられ
松にかゝれる如くなり

平治の昔しみなれとに　仇せし報ひありそ海の

そことゝしらず鳴聲を　あやしときけば淡路島

かよふ千鳥の影のみぞ　浪間隠れに残りける

明治四十三年六月十日印刷
仝　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎

印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎　電話東四五五九番

印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂　長電話東二七〇番

265
109